

一枚の絵、その向こうにあるもの イラストレーターからのメッセージ

語り手:城谷俊也さん(永福在住・イラストレーター)
インタビュー:紺野沙良さん(文化女子大学付属杉並高校2年・女子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■はじめに

絵！ ちょっと歩けば、いいえ、歩かなくても自分のまわりには絵だらけだということに気づくと思います。そこにある物、というようにしか絵を意識したことがない人もいるかもしれません。しかし！ 絵があれば必ず作者がいるのです。今回は、水彩で柔らかくイメージを表現される城谷俊也先生にイラストレーターという職業についてインタビューさせて頂きました。

■イラストレーターについて

イラストレーターは絵を描くお仕事です。城谷先生のお仕事は、書籍、雑誌、広告関係の挿絵、カタログの表紙、雑誌のカットなどをメインにしているそうです。お仕事でのイラストは好き勝手に描くのではなく、相手の注文に合わせる事が多いです。

編集者の方に(依頼主は編集者が多い)、「だいたいこういうイメージで描いてくれ」と言われた時、まず相手がどんな仕上がりをイメージしているのか、出来る限り正確に理解しなければなりません。そこができないと、どんなに良い絵を描こうが相手が納得しない事があります。しかし、依頼主の意向を生かしながらこちらから提案をする場合もある、と城谷先生はお話していました。

そして次に、自分なりの工夫や個性を生かしながら、注文に沿った絵を描くという流れです。城谷先生の絵の制作過程は最初

にラフスケッチという下書きを中2日程度かけて描き、編集者のゴーサインが出ると色を塗ったり、仕上げに入ります。城谷先生はほしい1週間ほどで絵を完成させるそうです。

個性、と言われても漠然としたイメージしか浮かんできませんよね。城谷先生に自分に来る注文についてお話を頂きました。

「科学専門誌に載っているような、人体とか内臓の絵は無機質で気持ちが悪いでしょう。そういうリアルな絵を求めるときもあるけれど、一般の人が雑誌を読むときに描かれてあると読みにくい。そういった経緯で僕に“人の温もりを感じさせるような水彩画”の注文がくるんだと思います」。

城谷先生は水彩画だけでなく、フォトショップというパソコン用ソフトも使っています。水彩で描いた絵の加工やポップな感じのイラストも描いていて、城谷先生のホームページでも見る事ができます。ホームページでは先生が自分の絵について、それぞれコメントをしています。絵を描くのは感覚的なものだから、何も考えずに描いていると思っている人は多いのではないのでしょうか。先生のコメントを読むと、どれだけ絵にこだわって頭を使っているかがみえてきます。先生のこのパワーはすごいと思います。



▲私の描く水彩画に温もりを感じてもらっているのかな。

現在の城谷先生のイラストには、「ころろ」をテーマに描いているものがあります。私はホームページにある「飛び立てない心」とい

う絵が好きです。自分を見つめるのが上手いからこそ描ける絵なのだと思います。こういった「ころろ」の絵を描く時は、ずっとそのテーマで描く「ころろ」と同じ気持ちなのですか、と聞いたところ、そんな事はないそうです。最初の描きだしはそんな気持ちでいるようですが、明るい気分になってもさびしい絵を描いたり、さびしい気分になっても明るい絵を描いたり・・・面白い話ですね。

■城谷先生について

城谷先生の子供時代は、やはり工作などが好きだったようです。人と共同で何かを作るより、一人で作る方が好きだったとか。内向的で、自分の中の空想を広げる人だったそうです。武蔵野美術大学で絵について学び、デザイン会社に勤めていました。しかし「デザイナーの仕事には痕跡が残らない」。城谷先生は、ここからここまでは自分の仕事、自分の世界というものが欲しいと感じてデザイナーからイラストレーターに転身しました。

どんな仕事にも苦勞や苦惱はつきものではなく、先生はやめたいと思ったことはありませんかと聞いたところ、「いろんなことで、一番自分が好きなことを仕事にしているのだから、と割り切っているのだから絵を描くことが嫌いになることはない」と答えていただきました。その言葉からは、人柄も温かく、言葉も温かい城谷先生の「絵が好き心」がキラキラと光って見えました。先生がまぶしかったです。

最後に、城谷先生はどんなものを信念にしていますか、と聞いてみました。「気難しく考えないで、自由に、自然体でいきたい。ガチガチに考えないで、長く続けられるようにするにはどうしたらいいか、と考えるようにしている」。



【紺野 沙良さんの感想】

自分をみつめることは、「かたい」感じがしたのですが、城谷先生をみているとそうではないように思えました。お話を聞いているときに「苦勞」だとかそういう話をあまり聞かなかったので、先生はそういうところはスパッとわりきってニコニコしているんだと思いました。ニコニコしているけれど、夢を諦めなかったり、キッチリした絵を描いていたりと、自分に対しての厳しさがあるんだと思いました。私もそういうものを持ちたいと思います。城谷先生の生き方を参考にしつつ私もイラストレーターを目指します。大変素敵な機会を与えて頂き、有難うございました。

【城谷 俊也さんの感想】

このような形でインタビューを受ける事はまれなので、最初は大変緊張しましたがインタビューである紺野さんの誠実な性格に助けられ思っていた事を自然にお話しする事が出来ました。また、実際インタビューという形で言葉にしていく事で、自分自身を再認識する事が出来、良い機会を与えて頂いたと感謝しています。これからイラストレーターを目指される方には、手の持つ表現力や自然の素材の持つ美しさを大事にしつつ、自らの可能性を探究して行って頂きたいと思います。また、ただ好きな絵を認めてもらいたいと望むだけでなく、誰に何を伝えたいのかという視点で描く事がイラストレーションにとっては大切だと思います。

良い医者になる条件は、 勉強ができること、ではなく、人が好きであること

語り手:河北博文さん(医療法人財団 河北総合病院理事長)

インタビューア:田中新さん(神明中学校2年・男子)、店網一二三さん(井草中学校1年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■河北総合病院について

河北総合病院は1928年5月に創立され、今年(2005年)で78年目になります。創立した頃は、30ベッド、内科と小児科だけだったのに現在は外科や産婦人科などもある「総合病院」になり、なんとベッド数は本院・分院合わせ391ベッドもあり、その他、堀ノ内にある「河北リハビリテーション病院」、桃井の「介護老人保健施設シーダ・ワーク」など合わせて638ベッドにもなります。最近の特徴は、病気を治してあげたいが、治すことができず病と一緒に生活しなければならない人が増えていることだそうです(高齢者の患者さんが多い)。

河北総合病院は24時間対応で、1年間に休みは1日もありません。これはいつ、病気の人が運ばれてくるのかわからないからです。24時間対応を支えるのがチームワークです。サッカーと同じで、お医者さん、看護師さん、それぞれ一人ひとりではなく、チームで対応するそうです。

「あたたかく やさしく 人にも地球にも」、これが河北総合病院の標語です。人に優しいのはもちろんですが、地球環境も考えなきゃいけないと、河北先生は力強い調子で言っていました。たとえば、病院から出る職員、患者さんなどの食事の残りは、病院内の装置でたい肥にして、その土を埼玉県農家で使ってもらっています。

河北先生は、若い人たちにもっと環境問題に関心を持ってもらいたいと言います。

「先日は大雨で杉並区でも大きな被害が出ましたし、アメリカではハリケーンで大災害になりました。地球環境が変わり、これからはこういう災害が度々起こるでしょう。ムダな電気は消す、食べ物は残さず食べ、よけいに作らないなど、一人ひとりが毎日の生活の中で地球環境を考えてやっていこう」と。



▲総合病院と地域診療所、お互いに補い合って地域医療が良くなると考えています。

これからの河北総合病院は、地域の診療所(クリニックなど)などお医者さんが1~3人の病院と競争するようなことはせず、診療所でできることは診療所にまかせ、河北でしかできないことをやっていくそうです。たとえば、夜間の小児科診療などで、夜、どんな時間でも小児科医がちゃんとして診療できる体制をつくることです。子どももおとなも安心して、河北総合病院があるからこの地域に住むことができる病院づくりが目標だそうです。地域の人たちから、こんな病院があつてよかったと思われる病院にしたいそうです。小学校5年生の子どもが一人で河北総合病院に来て困らないように、病院内の案内の仕方などを工夫しています。困っているときはこちらから先に声をかけようと病院スタッフに言っています。なぜ、「小学5年生」なのか? それより年が下なら親と一緒に来る人が多い、でも5年生くらいになったら、「もう一人で行きなさい」、と言われる年齢だからとのことです。

■河北先生(河北博文さん)のこと

河北先生は、おじいさんも、お父さんも医者だったので、物心がついた頃(幼稚園生の頃)から、あとをついで医者になるのが当たり前だと思っていました。お父さんは河北先生が23歳の時に亡くなりましたが、それまで一度も医者になれとは言われなかったそうです。でも、そのかわりお母さんからは、医者になるためにあれこれ細かいことを言われたそうです。父親と母親は、それぞれ役割を分担していたことを、大きくなって気がついたと言って笑っていらっやいました。

大学(慶應義塾大学医学部)に入って、河北先生はあまり勉強しなかったけれど、まわりには、良い医者になりそうな人がたくさんいました。そういう人たちがきちんと働ける環境を作ることが自分の役目だと思い、アメリカへ留学してシカゴ大学大学院ビジネススクールで経営学の勉強をしました。また日本の医療の仕組みや年金など社会保障制度について学びました。特に河北先生の専門は、直接患者さんに接し治療するお医者さんではなく、病理学(病気の定義・病因などを探る学問)が専門で、患者さんの病気が重いのか、軽いのか、どのような病気なのを見極める仕事と、働きやすい職場を作ることを受け持っているそうです。

いくつか質問をしました。

Q1. 医者になるのは難しいですか?

A1. 勉強は「継続する(休まず続ける)」ことが大切で、学ぶこと、やりたいことをやるためには毎日毎日の積み重ねが大切です。良い医者になれる人は勉強ができる人ではないと思います。人間が好きで、人ときちんと話のできる人が良い医者の条件の一つではないだろうか、との答えでした。この気持ちと資質があれば、良いお医者さんに



なることは難しくありません。高校時代はラグビーをやっていました。週3日、1日に2時間くらいしか練習しなかったけれど、その積み重ねが実って、“花園”まで行ったのです(全国高校ラグビー大会は花園ラグビー場で行われる。高校野球の“甲子園”のような存在)。

Q2. 夢は何ですか？

A2. いろいろあります。たとえば、公園の真ん中にサッカー場を作り、その周囲を馬の道にして馬と人がふれあえるようにしたい。イギリスのロンドンには、大都市なのに馬の道があります。日本には自転車専用の道すらありません。馬と人のつきあいは古く、“いやし”の効果も他の動物よりも大きいとのことでした。私たちがサッカーに夢中ですが、ちらりと横目で見ると馬が歩いている場所でサッカーができればいいなあと感じました。

■その他

医者は大学を卒業してからが大変で、一人前の医者になるために「研修医制度」というものがあって、これは、先輩の医者と一緒に患者さんを診ながら実地に学ぶ制度がです。河北総合病院は1948年から研修医を受け入れていて、教育病院として60年の実績があります。

従来の研修医制度は、ほとんどが大学病院でやっていたため、患者さんの病気も専門分野に偏りがちでした。これからは、なにかトラブルがあったときに対応できるようにいろいろな病気に対応できて、病気をしっかり診ることのできる医者を育てないといけないと考えているそうです。

【田中新さんの感想】

僕は小学校5年のときに盲腸で河北総合病院に1週間入院しました。まわりの患者さんが大人ばかりだったので、親が帰ったあとの夜はとても寂しかったのを覚えています。だから、はじめ河北総合病院の理事長

とインタビューすると聞いたときは、入院した時の暗い気持ちを思い出してしまいました。

でも、理事長の話の中で、いつも患者さんが満足する、よい病院作りのために色々なことを考えていることを知りすばらしいと思いました。また、理事長の話の中で特に印象に残ったのは、何かをするためには「継続」が大切だということです。毎日の積み重ねで大きな成果が生まれるのだと思います。サッカーをやっていてすぐにはうまくいかないけれど続けているうちにできる技があります。それと同じです。僕はまだ将来何になるのか決めていませんが、このことを忘れないでがんばろうと思います。

病院の環境負荷を軽減することについてもそうです。小学校5年で勉強し、実践したKids ISOプログラムを思い出し、自分でできることを少しずつ続けていこうと思います。その積み重ねが地球の環境を守っていくことにつながるのですから。とてもためになる話を聞かせていただきありがとうございました。

【店網一二三さんの感想】

お医者さんには、すごく勉強ができる人じゃないとなれないというイメージを持っていたのですが、河北さんの話を聞くと、「人間好き」な人が良いお医者さんになれるとおっしゃっていたのが印象的でした。これからも河北総合病院に、地域のためにいろんなことにチャレンジしてほしいと思います。最後に、全国高校ラグビー大会で花園まで行ったなんてすごい選手だったんだと思いました。

70歳現役の扇職人はアイデアとハイテクで勝負する

語り手:内田順久(うちだ・よしひさ)さん(宮前5丁目在住 扇職人)

インタビュアー:深沢 拓未さん(井萩中学校2年・男子)、今川 文吾さん(荻窪中学校2年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■内田さんの子どもの頃の思い出

聞いた話を元に、少し調べごとをして書き出します。

子どもの頃、豊田佐吉翁(自動織機発明し、現在のトヨタグループの礎となった)にあこがれていました。どうして佐吉翁にあこがれたのかというと、昔から日本は木工技術が発達していたので、農具や精密な仕掛けで知られるからくり人形などは木細工で作られていました。佐吉翁は糸繰返機の絵図面を作り、宅間喜右衛門という指物師兼建具師が木工技術を駆使し、糸繰返機を製作したことが契機になってその後、自動織機が発明されたことを知ったからだそうです。算数、算術は、親しみやすい勉強だったので真剣に学び、小学生でも円周率なんかも知っていたので近所の大学生をつかまえて生意気な話をしていました。自分の周りには今考えると理数系の人たちが多かったように思う。

一度、空を飛んでやろうと真剣に考え、すずめをつかまえて、自分の体と比較して、自分が身に付ける羽を作ろうと考えた。竹と和紙でどのような羽を作ったら空を飛べるか計算し、試作した。その羽をつけて山の上から飛ばうとしたところ親にばれてしまい、自慢の試作品をすべて捨てられてしまったことがある。親を心配させること、悪いこともいっぱいしました。兄弟の4番目なので、学校でどんなに悪さしても親は先生

の前に出てこないことが分かっていたので先生も怖くはなかった。全クラスの生徒を敵にまわしても平気な小学生時代でした。

■職人の修行で学んだこと・得たこと

中学を卒業したらすぐ職人になることを決めていた。ふるさとの滋賀県甲賀郡信楽町多羅尾(現・甲賀市)から先輩職人を頼って上京、浅草の扇職人に弟子入りした。浅草方面は芸事が盛んなところなので扇、扇子職人がたくさん住んでいました。朝早くから夜遅くまで働いたが、仕事を教えてもらう立場なので、給料はなく小遣い程度程度と与えられ、住まいと食事だけは保証されるという生活です。出るご飯も十分腹いっぱい食べるだけの量はなかったので、トイレにパンをかくしておいて空腹になるとトイレでかくれて食べたりした。食べ盛り、育ち盛りの自分にとってつらい日々であったとのこと。

能・狂言・舞踊などに使う扇を作る職人として技術を身に付ける修行を始めることになるのですが、扇を作る道具は20種類くらいしかない。道具が少ない分、手先の技術と勘が必要となる。しかし、技術は理屈ではないから体で覚えるしかないのです。親方に手際が悪いと怒られ何度も失敗をくり返す中で、技術を体にしみこませてゆく、失敗が多いほど覚える技術が増えることとなります。親方はお金のことを考えたら、早く技術と要領を教えて弟子が失敗しないように指導した方が得だが、それをやってしまうと、いつまでたっても技術は身につかない。だから、たいていの親方は弟子には一切教えないことにしている。失敗した時にはじめて少しアドバイスをしてあげる。

そのおかげで、いまでも小刀があれば身の周りのことが大体できる、一人で生きていくには何を身に付けたいとけないのかよく分かった小僧時代でした。小刀で切る、

削る、穴を開ける…何でもできるから、竹のヒコキなど小刀1本あれば作ることができる。君たちの親が子どもの頃に、指にケガをしながら小刀の使い方を覚えた。それと同じことだと言っていました。内田さんは僕たちに「人として生きていくコツ」を勉強してほしいと思うと言ってくれました。



▲昔は奉公に入ると親方に新しい名前を付けられたんだ。本名で呼ばれなくなるんだよ。嫌だったねえ。

■発明と特許

地球上には46億人の人間がいて、同じようなこと(アイデア)を考える人が数百人もいるはずですが、でも、せっかく考えたものは書類(形)にしないと他人は認めてくれない。だから何か新しいことを思いついたら、特許を取るしかないと考えた。

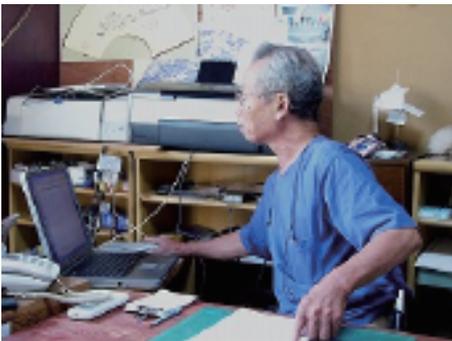
最初に特許を取ったのは昭和38年、27歳のときです、技術特許の申請書の書き方がわからなかったから、浅草で木版版画の刷り士の紹介で銀座にある弁理士井上清子特許事務所を訪ねました。この弁理士さんは、日本で初めての女性弁理士でしたが、井上清子さんのお父さんが鍛冶屋職人だったので職人さんには特別のおもいがあり内田さんを励ましてくれたそうです。

扇を作る道具は少ないから職人自身の技術がないと作るのが難しいたくさん作れない。お中元とお歳暮用などの扇を安く提供するには機械で作るのがいいと考えて、扇に折り目をつける機械などを作って特許をとった。自分が特許をとって安い価格で扇

↓
を提供すると同業者(扇職人)は困るかもしれないと初めは恐れたが、いずれは他の人が同じような考えで特許をとる人が出てくると思うことにした。田舎から出てきて一人で生きて行くには自分の得意の技術力を発揮するしかない。親方が自分に教えてくれた「生きて行くコツ」と考え、恩返しですと割り切ったと言っていました。

■扇づくりのこと

内田さん自身は「職人」というより自分を「技術者」だと思っている。だから、職人ならやらないことをやる。例えば、スキャナーなどを駆使して、扇の図柄(デザイン)を3000強、パソコンに入力して管理している。絵師が描いた手描きの原稿(絵・デザイン)を使って40本とか50本の扇を作るという仕事がある。昔からのやり方なら木版印刷などを利用するから百万単位の仕事になる。しかし、40~50本程度の扇を作るのにそんなにお金はかけられない。踊りなどに使う扇は、鑑賞するためのものではなく、使い捨てになるものだから、いわば消耗品と考えた。使う人もあまりお金を扇にかけることはできない。そこで原稿をスキャナーで取り込み、プリンターで印刷するという方法でやると、安く作ることができる。こんなことをしたので、芸事を中心地の浅草から離れた杉並区に移っても注文に困ることはなかった。



▲パソコンも内田さんの大事な道具の一つ、既に3000を越す扇の図柄がパソコンの中に入っている。

もう一つ、内田さんの考えたことを紹介します。「扇の要」という言葉があるように、扇では要が重要で、これがないと扇にならない。自動車でいえばクラッチの役割をする

ものです。昔から要はクジラのヒゲを使ってきましたが、今では捕鯨禁止なので入手するのが困難だから真ちゅう製の要を使うようになった。でも、プロの踊りの人たちは真ちゅう製の要の扇は安っぽくて使いたくないという。そこでクジラのヒゲの代わりに、釣り竿に使うグラスファイバーを利用してクジラのヒゲに似た要を作ることを思いついた。クジラのヒゲより強く、しかも人工のもので虫がつかないというメリットがあるので大変喜ばれたことでした。

■他人への想い

年を取るに従い生まれ故郷のことが懐かしく同級生、先生がどのようにしているのか気になりだした。自分でできることが役に立つならと考えて得意のパソコンを活用している。たとえば、出身地の多羅尾は昭和28年の台風の豪雨のために土砂災害が起こり、死者44名、全半壊流出戸数が全村の3割という被害をもたらした。家族の写真やアルバムを失った人も多い。だから、自分の持っている写真をスキャンして故郷の人たちにあげたりする。このようなことを喜びと感じる年頃になった。弟子は実の娘を含めて2人いる。弟子は私とは違い、職人気質(かたぎ)だが、孫弟子は私と同じパソコン派である。弟子が親方と違う生き方をしてもいいと思う。だから、やり方も教えない。ただ、「生きるコツ」を覚えてほしいと願っている。

【今川 文吾さんの感想】

今回のインタビューをして驚くことばかりでした、特に驚いたのは、扇の要に使う鯨のひげを手に入れることが難しくなったので、品質を替えずに代わりなるものと考えて、工夫するという対応の仕方でした。他にも「この人は本当にすごい人だなあ」と思わせることができました。インタビューで、扇のことをいろいろと知ることが出来て良かった、ありがとうございました。

【深沢 拓未さんの感想】

日本の伝統的な扇を作る技術を伝え続けることと、生活の中で使う扇との間には品質・量・価格・作る技術などの問題があることを知りました。この中で、扇を簡単に作る方法を簡単に考え出す内田さんを知り驚きました。新聞に載るほど大きな扇を作るということはすごい伝統的な技術がいると思います。その技術にこだわらないで、安い扇も作る工夫をするという、この人はすごいと思いました。本当にありがとうございました。

【内田順久さんの感想】

愛弟子の三人が独立しました。孫弟子が二人、見習い中が二人です。私はどちらかというと職人というより技術改良者だと思いますが私の弟子はうまくしたもので、職人らしいよい仕事をしてくれています。このことが私の自慢です。

また、私の環境は仕事場に一日中いての仕事ですから、いろんな人に会えなかった。扇づくり(末廣ともいう)のことを皆さんに知っていただきたくて仕事場から出て学校で、扇づくりを実演したり、体験していただいたりしています。お目にかかった人からヒントをいろいろ頂いて私の仕事、人生も変わったところもあります、若い人と話ができありがたいと感謝しています。

個人の資産相談 1, 2, 3... 承ります

語り手:河田 淳さん(宮前在住 プライベートバンク勤務)
インタビュー:朝枝英也さん(一ツ橋大学4年・男子・宮前在住)



■河田さんの仕事＝「プライベートバンク」のこと

プライベートバンクという日本ではなじみの薄い言葉に興味を持ち、河田さんにお目にかかることになった。「プライベートバンク」の業務を簡単にいうと、「資産家のお金の運用と管理」である。河田さんは、スイスに拠点を置くプライベートバンクの東京駐在事務所(1992年～)に首席駐在員として勤務なさっている。

スイスのプライベートバンクが得意とする顧客は主にビジネスオーナー(企業オーナー)をはじめとする資産家である。すべて紹介をしていただきながらお客様を見つけていく方式で、顧客開拓をしていく業務であり、いわゆる営業はしないそうだ。

当然、業務の中には、スイスでは可能なことでも、法律的な問題などにより日本では不可能ということもある。日本においては、そのような事情で顧客数は限られるが、ゆっくと時間をかけていくことをモットーにしている、とのことであった。

取り扱う業務は、すべて顧客(ファミリー)一人ひとりに応じたオーダーメイドとなるそうだ。顧客一人(1企業)につき一人の専任担当者がつく。オーナー企業の資産経営、役員としての責任資産と個人資産との線引き、個人の株式等資産、家族の資産などを対象に、それぞれ専門のスタッフが3～4名でチームを組み、法令順守、資本と経営の分離などの観点から広い視点で運用・管理

をしていく。その中で、河田さんは指揮を執るコンダクターの役割をしていらっしやること。当然各担当者は、それぞれの専門的な知識をもって資産の管理運用をしていくわけだが、河田さんいわく「時々気が狂いそうになる」とか。確かに、さまざまな視点を持ち、情勢に応じた資産の運用を行っていくのであるから、その責任や、刻々と変る情勢を見極めていくのは、大変なことだろう。

基本的にヨーロッパは階級社会であり、それを背景にプライベートバンクが生まれた。そして、「資産家や地位の高い人々は、その資産や地位の高さに応じて社会的な義務が生じる」というのが社会的な認識として定着している。ボランティアや寄付などが典型的な例である。日本は階級社会ではないために、プライベートバンクがなじみにくいと思われる側面がある。

しかし、「IT長者」など、いわゆるニューリッチ層が出現し、それらの層に適した金融相談管理のあり方も模索されており、今後は日本でも拡大することが予想される。都市銀行などでも、「プライベートバンキング」という形で対応をし始めている。

河田さんは、こういう現状を「身長も体重も、生きてきた空間も、人それぞれ違うのに、これまでの日本の金融界はすべて標準体型のみで対応してきた。標準体型の服が着られないのは、着られない方が悪い、という考え方でやってきた。日本の金融界も、今後はもっと細分化してゆく必要がある社会になっていく」と捉えている。

一方で、その標準化を善しとする日本独特の考え方は、河田さんの仕事上の悩みともなる。つまり「顧客のニーズの意味が多岐にわたりははっきりと示されないことが多い」のである。顧客自身が「どのような会社にしたのか」「今後どのような生き方をしていくのか」が示されないことが多いというのだ。例えば、会社をより大きくしたいのか、中型の

規模の会社でいいのか。あるいは、自分が作って大きくした会社であるが、今後、自分は資本家で行くのか、経営者として活躍するのか、違う会社をまた作り頑張っていくのか等、顧客のニーズがどこかにあるのか明確につかめないとアドバイスのしようがないというわけだ。資産を管理していくために、会社・個人・家族・社会の4つのカテゴリーに分け、それぞれにアドバイスをしていくそうだ。顧客の意向がはっきりしないことには、何もできないということだ。確かに、顧客の意向を分析・分類していくことは、資産運用管理に必要な不可欠なことだと思う。



▲多様性の時代と言われながら、日本の金融制度は標準的な形しかなくて、細分化した顧客の要望にどう応えていくかが悩みの一つですね。

■河田さんの見る日本の現状と未来

日本が世界一と誇れることのひとつに、大学進学率の高さがある。同時に大学卒業者の犯罪率が低いことが挙げられる。しかし、それは「おれはこのレベルでいいのだ」とぬるま湯的、横並び的に小さくかたまっている現状と対応しているように思われる。だから「成り上がろう」とする人が少ないのではないかと。

会社というのは、本来「財を確保することによって、便利な組織と機能をもっている」ということで、その存在価値があると思う。商品やサービスを提供することには興味がなく、ただ財のみを増やすことだけに興味がある人も

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。

いるし、その商品やサービスの提供のあり方に興味を持つ人もいる。会社はトップの考え次第で自在に変わっていくことができるような仕組みになっている。人の生き方も人それぞれ、日本人の価値観も年々多様化しているので同じ会社でも、営業方針、理念でさえも変化していく。

また、個人企業の見直しが必要な時を迎えている。ニーズは多様化し、大企業のみではそれらに対応しきれなくなっている。細かいマーケットには小回りの利く個人商店の方が対応しやすいと思う。そのような変化の時期を迎えているのに、日本の若い人は、いまだに大企業指向が強い。

そのような意識を変えるべきだろう。「人気企業ランキング」に数十年間も大きな変化がない日本の現状はおかしい(河田さんの学生時代とほとんど変わっていないとのこと)。これは世界でもまれなことだ。

■ ボランティア活動のこと

河田さんは本業の傍ら、ボランティア活動も行っており、NPOファミリービジネスネットワーク(インターナショナルな組織)の理事でもある。何故、そのような活動を始めたのか、伺った。

日本だけでなく、世界的にみても、資本と経営が分離されていない会社が圧倒的多数を占める。日本でも大企業になりながら上場していない会社はいくらでもある。それは、ファミリーで経営していることのアドバンテージが、その会社にうまく合っているのだろう。つまり、家族経営がうまく機能しているといえる。それなら、家族経営的な会社の機能を他社もまねてみれば…というのがそもその始まり。

「生きたお金の使い方をする」と言われるが、お金を上手に使うことは大変難しい。経営者も、経済的に安定するに従い、いろいろな欲が出てくる。たとえば、ベンチャーキャピタルに投資しても回収できないことが多いので、悩んでいる人が多い。こういう方々に社会的に生きるお金の使い方をアドバイスするのも活動のひとつである。この分野

は、西欧の同業者が顧客に必ず勧めるメニューの一つになっている。また、会社を自分の子どもに継がせるのか、それよりもっと優れた外部の人に任せるのか…そんな相談にも応じる。

■ 今の若者の悩みや疑問への回答、その他ご意見など

1) 仕事(人生)を長く続けていると、いろいろなものが心の中に澱のようにたまっていく。これは生きていく限り仕方がないこと。それを愚痴にして酒で紛らわせる人もいるが、それは空しいだけだ。自分の心の中にたまっていくものをちやかすことで、また新たな気持ちになれる。嫌なことを“芸の肥やし”だと思ふこと。

2) ヨーロッパでは、働くことにあまり高い価値観を置かないところがある。ある年齢に達すると、それまで蓄積してきたものを社会に還元・配分することを考える人が結構いる。“持てる人(資産家)”はお金を使うことに忙しい、そうでない人は生活のために働くことに忙しい…人生さまざま。どちら側に立つか? そのためには、どうするか、考えていくことが大事。

3) 文系と理科系とどちらが大変か?

一般的に理科系の方が大変というが、最終的には目に見えるモノを作っている理科系より、“答えのない世界”で働く文系の方が大変なのではないかと思う。

4) 河田さんの仕事や人生に対するエネルギー、その源は?

「自分の嫌いなことは、人と同じことである」。会社に入った当初から、周囲の人と同じなのが嫌いで、白いシャツは着たことがない。もうひとつは、コンプレックスを認識すること。「自分の中のコンプレックスを見つけろ! そしてそれに立ち向かえ!」

学校教育などで、人より劣っていると、それは個性だから気にするな、などというが、それは間違い。世の中、平等なんかない!

不平等と認識するところからスタートすべきだ。

■ スイス(ヨーロッパ)と日本の比較

河田さんが感じている日本とスイス、欧米の特色を伺ったところ、スイス人と日本人は、メンタリティに関しては似ている、また勤勉なところも同じ。家族経営も多く、それを卑下しているようなところもあり、似ているかもしれない。

では、違う点は何か。日本人は創造性に富んでいること。スイス人は、一度決めたことはずっと変更せずに維持するところがある。ひとつには、永世中立国なので、戦争による負債もなく、大きな国の資産があり、新しいことを始めるより、それを守ることが優先されるためだろう。

また、イタリア語圏、ドイツ語圏、フランス語圏と、1つの国とはいえ、スイスは連邦制で、共通のものが少ないのが特徴であると。

スイスには、観光と銀行くらいしかない。製造業も製菓、時計、チョコレートくらい。もぬけの殻のような国だから、何をしても外から持ってくるしかない。「日本は島国」とかかれるが、そんなことは日本の歴史(海外との交易など)を見ても間違い。そう思われた方が有利という層がいるのだろう。農業の国というのも違う。フランスの方がよほど農業国といえる。

同じヨーロッパでも、イタリアやスイス人は家族愛が強く、北欧は個人主義というか独立心旺盛。ちなみに、アメリカでファミリードラマが盛んなのは、2組に1組が離婚するという社会的背景があり、願望のあらわれなのだろう。

【朝枝英也さんの感想】

1) 若い人たちへのメッセージということで河田さんは、「寄らば大樹」という考え方ではなく、自分で考え、変化に対応できる「個」の大切さを話して下さったように思う。確かに、資本主義経済の中であって、自分で資金を運用し、財を作り、常に社会に対応していくという考え方は魅力だ。しかし、それには、自らが学び、実践するという

↓
 意思と知恵がいるだろう。難しいことだと思うが、河田さんには、その中で生きてきたと言う自信が感じられた。

2) 確かに、お金を有効に使うということは、難しそう。単に投資ということだけでなく、社会的に生きるお金の使い道ということを考えていくことは、大切であるが、1950年代以降の日本ではなかなかなじみの無いことではないだろうか。個人の資産を有効に生かす分野の研究、調査も魅力的な仕事のように思われる。

小さな政府を目指すといわれているが、本来行政のやるべきメニューを少なくしていくならば、今後、民間企業、ボランティアやNGO、NPOなどに行政機能の一端を肩代わりさせることもあるようだ。ボランティアなどの活動が本当に意義のあるものなら、そういう活動の支えにもなる資金というものをもっと真剣に考える必要があると思う。

3) 日本人が、創造性があるという評価はびっくり。だが、確かに、「真似る」ことから、新たな形を作り出したり、色々なものを「日本的」という味付けにしていくことは、得意かもしれない。日本的な味付けを日本人の創造性発露として評価するなら、欧米流でも、イスラム流でも、アジア流でもない、日本流という国際ブランドが出現するかもしれない。様々な国で、新たなプライベートバンクの形が求められ手いるので、河田さんは、「日本流」を「国際化、普遍化」する仕事の魅力を感じているのではないだろうか。

【河田淳さんの感想】

常識の嘘という言葉があります。小生が学生生活を終える時代まで、スポーツをするときは水を飲んではいけないといわれておりました。忘れもしないある全国大会、某社の健康飲料水(粉末)が、スポーツボトルとペアで大量に無料配布されました。貧乏な学生はともかく物を貰えるのがうれしくて、引き払わなくてはならない下宿先に、大量に運び込んだくらいです。すっかりスポーツ

と縁が薄くなった社会人3年目ぐらいだったでしょうか。後輩の合宿に差し入れをもって出かけてみれば、数分おきに水分を口に含んで練習する、彼らの姿がありました。鈍い私でもやっと気がつきました。絶対と信じられていることでも、覆ることがある、と。結構これ、小生の原点なんです。

時は更に20年を経て、同窓会でショックを受ける破目になります。田舎の高校を卒業したのですが、まあ、それなりに進学校でして、学歴社会の頂点に存在する大学に、毎年10名程度合格するのが定石だったのですが、ここ数年、ゼロの年があるらしい。そればかりか当時、ちょっと評判が悪かった高校が確実に合格者を輩出している。要するに特進クラスができて、且つ授業料免除みたいな「マーケティング」が行われたわけなのですが、その進学の前は何があるかはさておいて、進学という手段のパラダイムは、すでに大きく変わっていたのです。昔お世話になった会社の人事部に在籍した時代、「優秀な学生を採用したければ、大学ではなく、その出身高校を見れば良い」という基準があったのですが、まあ、その効力も薄まってしまったみたいですね。

朝枝さんと話をして、物事の両面性を意識しているかという興味を持ちました。職務上、また生活におけるすべてにそうなのですが、例えばタバコ(吸ったことがないので、わかっていないのかもしれませんが)には発ガン作用などの有害物質が含まれている半面、リラックスをもたらす効用がありますよね。ヒステリックに禁煙を叫ぶ人、団体を小生は嫌悪します。下手な命名で恐縮なのですが、「絶対真理教」の信者には興味がないのです。ただですら人間は絶対といわれるものを信じてしまう弱さを持って生まれてくるのですから。勿論それは、両論併記で、結論を出さずにうだうだしている人を評価するという意味ではありません。時間は有限ですから、一つ一つの判断は早い方が良い。要するに結論はあくまで相対的なものであり、それでも結論を出さなくては

いけないのが、「文系人間の難しさ」だということ。朝枝さんがどういうタイプかというのは、見抜くことができませんでしたが・・・

一つ判断したら、また次の判断が待っています。小生なんぞが偉そうに指摘しなくとも、その大きな波に巻き込まれていきますから心配御無用ですが。

サッカーを楽しく続けるためにFC東京のできること

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。

語り手:村林裕さん(阿佐ヶ谷在住 東京フットボールクラブ株式会社 常務取締役)
インタビュー:竹原稔也さん(中瀬中学1年・男子)、古城景さん(井荻中学1年・男子)



■FC東京のサッカー普及活動

村林裕さんは東京フットボールクラブ株式会社(以下「FC東京」)の常務取締役です。ぼくたちの一番身近なサッカーについて話を聞きました。はじめに、FC東京がどうしてサッカーを普及したいのかを質問しました。村林さんの答えは以下のようなものでした。

少しでもサッカーの好きな子どもを育てたい、と考えて普及活動を行っている。サッカーが上手になれば、サッカーがさらに楽しくなるから、少しでも上手になれるように指導する。ただ、例えば、君が上手になろうと努力する、人より強くなろうと鍛えようとする、それは必ずしも楽しいこととは一致しない。しかし、楽しんでやっているだけでは上手にならないし、上手にならないと結局はサッカーをすることが楽しくなくなってしまう。ということで、FC東京の普及活動の基本は、「サッカーをしている子どもが、いつまでも楽しくサッカーができるようにしてあげたい」という目標をもって活動している。小学校の体育の授業にも出かけて普及活動もしている。どうしてかという、スポーツの好きな子ども、サッカーをしたい子どもにサッカーを体験してもらいたいからだ。FC東京には、20名くらいの普及・指導のためのコーチがいて、調布市、三鷹市、小平市など、さまざまな地域で子どもたちのサッカー指導をしている。

■サッカー界のこと／FC東京の練習生のこと

村林さんが今、心配していることは、小さいうちからサッカーを始めて、10代でやめてゆく子どもも少なくないということです。中学生、高校生は体が育つ途中段階だから、練習後の体の管理を怠るとすぐに体をこわしてしまうこともある。このようなことが起こらないように指導するためにFC東京では、20人強のコーチを東京23区内で、一日サッカースクールを年間100回開催している。また、FC東京では小学校6年生を対象に、FC東京の中学生クラスの練習生の入団テストがあるが、800人受けて受かるのは40人程度という狭き門である(合格するのが難しい)。どこを見て判断するのかというと、ボールを扱う基本技能とボディバランスをみるということです。FC東京の中では、年齢と学年は関係なく、中学3年生で高校生のクラスと一緒に、また、高校生になると大人チームと一緒に練習をしたり試合をする子どももいる。



▲ぼくも中学時代にサッカーをしていたけど、ポジションはスーパードだったんだ。今は聞かれなくなったポジションだね。

■サッカー以外の活動

FC東京には「FC東京バレーボールチーム」という男子のバレーボールのチームもある。V1リーグ(Vリーグの下)では3年連続優勝するなど戦績も良いとのこと。サッカーだけ指導するのではなく、バレーボールの指導もしている。3人の専門コーチが

いて、週末の土曜日曜に、女子中学生を対象に、バレーボール巡回教室を開いている。いまサッカーの人气が高く、サッカーを教える人はたくさんいるが、それに比べて、バレーボールを教える人は少ない。学校のバレーボール部でも専門のコーチがいないのが現状である。FC東京も、サッカーだけでなく、もっとバレーボールの指導に力を入れたいと考えている。

■FC東京の仕事(運営)の中身

FC東京を運営することについて聞いてみました。運営には試合の運営と会社の運営(経営)の2つがあり、まず、試合の運営としては、PR(FC東京の試合の案内や選手の情報などを伝える)、チケット販売、試合当日の準備など、さまざまなことがある。試合の当日になると、入場者(観客)がビンや缶を持ち込まないようにチェックしたり、ファンクラブの人にはカードをプレゼントしたり、試合の様子をビデオテープに録画したり、こちらもやることはいっぱいある。試合の運営のポイント(大切なこと)は、決まった時間通りにキックオフをすること、90分間きちんと試合をすること、観客が楽しく安全に試合を観戦できるようにすることなど仕事はたくさんある。

会社の運営として大事なことは、きちんと収入をあげて(会社にお金を入れる)、FC東京で働く人にきちんと給料を払うこと、そして新しいことに挑戦できるようにすることが基本です。そして、観客の安全の確保、子どもたちにサッカーの楽しさを知ってもらうことなども大切な点です。これら全部を合わせて行うことが会社の運営となる。組織の大きさは違っても、ぼくたちの所属するアヤックスのような地域のサッカークラブと基本は同じだと思うとのことでした。

FC東京は株式会社である。株式会社とは資本(お金)を集めて会社をつくり、お金

↓
を出してくれた人たちのためにも、会社がつぶれないように運営していくことが基本で、FC東京のお金を出している会社は、現在308ある。308のなかには、全国でも有名な大きな会社もあれば杉並区の会社もある。また調布市の花屋さん、練馬の米屋さんのような小さな会社もあるし、三鷹市、府中市などのような地方自治体も入っている。現在練習場は小平市にあるが、本社は東京都江東区にある。元々FC東京は江東区で会社をつくってスタートし、2001年までは江東区に練習場があったので、引っ越しはせずに、本社は江東区においたままにしてある。現在でも、中高生は江東区で練習している。

■村林さんご自身のこと／常務取締役の仕事

村林さんは中学時代にサッカーをしていた。そのときのポジションは、ゴールキーパーとスリーバックの間で守るスイーパー(スイープはホウキではなく、という意味)。当時は花形の重要なポジションだったんですよ。その頃は守る人と攻める人のポジションが明確だった。現在は、全員で攻めるという考え方に変わってきたので、スイーパーのように、守っているだけではもったいない、試合の展開によっては、あるときは攻めに参加すべきだ、オフラインを上げよう、という作戦、戦略になったことで、このポジションは、現在はあまり流行らないですね。

村林さん(常務取締役)の仕事をひとことずいとうと、FC東京の経営の責任者です。経営というのは、1年間の収入(入ってくるお金)と、支出(出てゆくお金)を決めること。支出では、選手といくらで契約するか、チケットをどれくらい売って、そのお金をどう使うかなど、何にどれくらいのお金を使うかを決めることです。学校に規則があるように、会社には会社のルールがある。経営の責任者として、会社のルールを決め、それを社員全員で守ってゆこうとみんなをリードするのも村林さんの大切な仕事です。



▲村林さんからお土産にFC東京の選手のサインやカレンダーなどたくさんグッズを貰いました。

【竹原稔也さん、古城景さんの感想】

今回、村林さんにインタビューできてFC東京のこと、村林さんのことなどを聞くことができてすごくいい経験になりました。ポスターや選手のサインまで頂いて感謝しています。ありがとうございました。

【村林裕さんの感想】

サッカーが好きだけでなく、クラブの運営にまで興味をもって一生懸命質問をしてくれて、ものすごく楽しかったです。みんなスタジアムに応援しにきてくださいね。私こそありがとうございました。

おまわりさんの長い一日とお仕事

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。

語り手:警視庁高井戸警察署 交通課・佐藤 英徳 課長代理、警務係長・山口 吉宏 警部補
インタビュー:鈴木亮太さん(桃井第五小学校5年・男子)、綾音さん(桃井第五小学校4年・女子)、湊大さん(桃井第五小学校1年・男子)



ぼくたち三人(妹と弟)で井の頭通りにある高井戸警察署の佐藤さんと山口さんに警察署の仕事についてお話を聞きましたので三人を代表して亮太がこの文章をかきました。

佐藤さんは、北海道の函館出身で、小学生のときにまちの中を白バイにのって走っているおまわりさんの姿を見てカッコいいと思ひ、皮ジャンをきて白バイに乗れる警察で働きたいという夢を持ったそうです。

警察官になるには、まず、おまわりさんになる試験に合格すること、次に警察学校に入りくんれんをうける。警察学校では剣道か柔道のどちらか好きな方をえらんで体をきたえる。剣道、柔道のどちらをえらんでもいいのですが、だいたい1対1の割合になる。高井戸警察署でも剣道をやっている人と柔道をやっている人が同じだそうです。佐藤さんと山口さんは柔道をやっている。それから、剣道、柔道以外にも、逮捕術や合気道(女性のみ)を習うといった。

■佐藤さんは交通のしごとですが

- 1ばん 交通事故が起きないように、みんなに注意し、ルールを守って、正しく運転をすることや、正しく歩くようにたのむこと
- 2ばん 白バイでまちを見まわる
- 3ばん 交差点など、道路に立って交通整理をする
- 4ばん ミニパトで見回り、駐車いはんを取

- りしまる
- 5ばん 交通規制 ひょうしきや信号機が見づらくないかチェックする
- 6ばん 交通事故が起きた場合事故の原因を調べる
- 7ばん 学校に信号機などを持って行き、横断歩道を正しく渡るように言ったり、正しい自転車の乗り方を教える

■交番にいる警察官の一日

- ・日勤 勤務時間8:30～17:15 昼間はたらく
- ・夜勤 勤務時間15:00～翌日9:30(寝られない) 夜はたらく
- ※交番の場合は4交代 4日昼間働き1回夜はたらく
- ※休みは決まってない、交替で休みを取る
- ※宿直は朝から仕事をして翌朝までやる
- 交番勤務の人は出前、弁当を食べる

■高井戸警察署では

高井戸警察署では約360名のおまわりさんが働いているそうですが、交通かかりの警察官がからだに身に付けているものをきいてみました。

- 1ばん 検問灯 車や人を止めるもの
- 2ばん 反射背負いです。上半身に着るので、夜に身に着けると光り、腰に白帯を巻いて固定しているものです。
- 3ばん 腰に帯革をまいて、特殊警棒、拳銃(相手が拳銃を持っている時、非常用で使用する)、手錠をそうびする。交番の人は無線機をもっている。それに加えて手袋、警笛、手錠、鍵警察手帳をもっている。

■警察犬について

警察犬の種類は、エアデルテリア、ボクサー、コリー、ドーベルマン、ラブラドルレトリバー、ゴールデンレトリバー、シェパードの5種類の中から選んでいます。とくにシェ

パードとラブラドルレトリバーが多い。多摩市と板橋区に犬舎があり、そこでくんれんをしています。まやく(麻薬)とか、大切な人の警備に、犯人そうさに活躍しますが今、東京では20匹いるそうです。犬のきゆう覚は人の6000倍以上もあり、人の臭いをかぐと、どこまでも追いかけていく。雨の日は臭いが消えてしまうので活躍出来ないけれど、条件さえよければ、犯人の帽子などの臭いを嗅いでかなりの所まで追いかけるのです。

■乗り物について

高井戸警察署ではパトカーは15台、ミニパトは2台、白バイは2台、覆面パトカーは6台、ぜんぶで、25台そろっています。

パトカー(ミニパトも含む)は5人乗りで常に二人のおまわりさんが乗っていますが誰と誰と一緒に乗るとい組み合わせはありません。そして、女のおまわりさんが2人の時は駐車いはんの防止にがんばるそうです。白バイは1人乗りで普通の車と違い赤色灯、無線、サイレンが装備されている。普段は制限速度で走っているが、緊急時は制限速度の10kmオーバーで走っている。

■交番について

交番の建物は6坪ぐらいで、裏に待機所があり、24じかん、2～4人はたらいています。交番のおまわりさんは街で起きた事件、事故にいち早くかけつけます。そして難しい事件、事故の時には警察署に連絡して、その事件、事故に必要な課の人に来てもらう。警察署の窓口である。警察署と交番がしっかり助け合う事が大切です。110番すると警視庁本部通信指令センターへつながり、そこから各警察署にはパソコンと無線を通じて連絡が入るようになっている。どこから電話をかけてきたかが画面に映し出されるので心配しないでよさそうです。そし



て、署から無線を通じて指揮をとる。現場近くの交番に連絡すると共に署からパトカーを出動させる。犯人がナイフ等を持っていることが多いので怖いけど、柔道や剣道、逮捕術を習っているの、犯人に立ち向かっていき逮捕する、怖いけれど勇気が大切です。

注)警察に連絡するときの電話番号、110番という数字は覚えやすく、昔はダイヤル式の電話だったからまちがいにくいし、すぐに電話をかけられるからです。

■小学校低学年の児童の事故の多い例についておしえていただきました。

1ばん 車と車の間からの飛び出し

2ばん キャッチボールやサッカーボールを追いかけて道路へ飛び出すこと

3ばん 自転車の二人乗りはダメ 自転車は軽車両と同じ扱いなので捕まる

4ばん どんな時でも止まる時はしっかり止まる

5ばん 信号がないところは左右をしっかり確認して渡りましょう

【鈴木亮太さんの感想】

高井戸警察署にほうもんして佐藤さん、山口さんに話をききました。佐藤さんは白バイにあこがれて警察官になったそうですが、ぼくは騎馬隊にあこがれます。お正月の期間は、皇居では、参賀する人の交通せいや警備に騎馬隊が出てきます。馬は近くで見ると大きくて怖いけれど本当はやさしい動物のようです。区役所の前で騎馬隊のおまわりさんを見たことがあります。すぎなみのまちの中を騎馬隊があるいて交通整理をすればみんな、協力すると思います。また、昔の白バイは車体が赤で「赤バイ」と呼ばれていたそうです。白のほうが目立つので白にしました、パトカーも昔は白でしたが、一般の自動車と区別ができないので車体の半分を黒にしたそうです。あとは、学校の校門近くで交通安全のしごとをしている

人は警察官としっかり連絡を取り合っているの、安心して下さいといっていました。警察官をやっていて一番うれしいと感じる時は、感謝された時で「ありがとう」といわれるとうれしいし、喜びを感じるといっていました。

【佐藤英徳さんの感想】

鈴木さんの子ども、3人なかよしとお目にかかりインタビューを受けました。外は車が勢いよく走っていますから、前後左右、よく見回して気をつけて歩いてください。

勝負に勝って初めて知る、“上には上がある”ことを。

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。

語り手:小田切秀人さん(阿佐ヶ谷南・こども将棋教室「棋友館」経営)
インタビュアー:伊藤風矢さん(松溪中学1年生・男子)



■はじめに、「棋友館」のことについて

小田切さんは、阿佐ヶ谷の中杉通り、ジョンナサンの上にある、棋友館(きゆうかん)という将棋の教室を開いていらっしゃいます。子供のための将棋教室で全国でも珍しい教室だそうです。

僕自身は、囲碁を習っています。将棋と囲碁は違うけど、教室の雰囲気はあまり変わらないなと感じました。僕がインタビューにうかがった時、ほとんど終わりかけの時間でしたが、まだ教室には10人ぐらい、僕より小さな小学生ぐらいの子が残っていて、みんな真剣に将棋を指していました。会員はおよそ130人ぐらい、小学生が約90人、中学生が約30人ぐらいいるそうです。ここでは、大人は指導者としてだけ関わります。

■囲碁と将棋の違いについて

囲碁と将棋には大きな違いがあって、将棋はもともとある駒が動くこと、囲碁は石が増えていくことです。囲碁は一箇所でもやられても他の陣地をとればいいのですが、将棋は一箇所がやられると、もうどうしようもなくなります。将棋は1手の比重が高く、絶対の1手という勝負に激しさがあります。将棋は男の子に向いているのかと小田切さんは思うときがある、男の子は普段から活発に動き回る、女の子は動くことが比較的苦手だからなのかと知っているそうです。囲碁は陣地を作ることを争い、白黒の碁石が絵

になります。

■将棋に興味を持ったきっかけ

小田切さんは小学1年生の時、腎臓を悪くして入院しました。その時に看護師さんに将棋の駒の動かし方を教えてもらい、また別の病棟に将棋の強いおじさんがいることを知り、こっそり病室を抜け出しては、1か月ほど教えてもらったそうです。このおじさんは足を骨折していたので小児科病室棟から外科病室棟にいき将棋の出張授業を受けたこととなります。小学4年生の時に碁会所の一角にある将棋教室に入り、工藤浩平先生の将棋教室の第一期生となりました。週に1回教えてもらい先生のご自宅にもお邪魔していたそうです。

中学2年生のとき、佐瀬勇次名誉9段の門下に入ったそうです。6級で関東奨励会に入会、プロを目指す特別な機関です。今の僕と同じぐらいの年齢なので、すごいなと思いました。でも奨励会は厳しく、年齢制限もあります。21歳までに初段、31歳までに4段にならないと退会しなければならなかったそうです。小田切さんは2級まで進むものの、退会されたそうです。



▲私は、将棋に出会って本当に良かったと思っています。ですよ。

■小田切さんの中学生時代

小田切さんは中学生のころ、暗記が得意だったので、教科では歴史が得意だったそうです。「将棋が得意」イコール「数学が得

意」なのかな? と考えたのですが、数学は普通だったそうです。

■「週刊将棋」の記者の仕事

奨励会退会後、小田切さんは4年間、週刊将棋の記者を務めました。今から20年前のことなので、今のようにメールどころか宿泊所にFAXがなく、地方で戦うタイトル戦では手書きの原稿を間に合わせるためにポータブルファックスを持参したそうです。プロの将棋は午前1時、2時に終わることも多く印刷日前は大変だったそうです。小田切さんの主な仕事は、写真を撮ること、原稿を書くこと。週刊というサイクルなので週に3回も徹夜するハードな仕事だったけど、今思えば楽しかったそうです。その後はフリーの著作活動。将棋を中心に旅行ガイドなども手がけられたそうです。

■子供教室を開くまで

奨励会時代は、将棋会館で「子供将棋スクール」の講師を担当したそうで、この時に子供に教える楽しさを感じたそうです。その後現在の棋友館を開くことになりました。指導棋士として子供たちに将棋を教えている、苦労することは、いろんな子が通ってくるので、駒の動き方がなかなか覚えられない子に教えるときだそうです。

大会で子供たちにいい成績をとってほしいが、相手のミスはねらわないで欲しい、いい将棋を指して欲しいと願っているそうです。また、将棋は勝負が激しく必ず負けることがある。負けるつらさを知らない人とに親切になれない、だから負ける気持ちを知ること大事だとか。将棋は自分一人が頼りの勝負です、結構つらいこともあるけれど強くなって上にはもっと上がある、ということを知った時、一生の趣味にできると小田切さんは言います。



▲将棋は勝ち負けを争うものですが、勝つためには何をやっても良いというものではありません。子どもたちには将棋を通して礼儀を身につけて欲しいと願っています。

■瀬川晶司さんのプロ入りについて

最近35歳でプロ編入試験に合格した瀬川晶司さんについても伺ってみました。瀬川さんとは面識があったそうです。日本将棋連盟のフリークラス編入試験に合格して2005年12月に4段のプロ棋士になった、61年ぶりの快挙、おめでとうという気持ちでいっぱいです。第2第3の瀬川さんが出てくれればうれしいとのことでした。

【伊藤風矢さんの感想】

小田切さんはとても優しい人でした。僕の質問に詳しく答えてくれて、将棋のこと、小田切さん自身のことを教えていただきました。また将棋に関するパンフレットやグッズも頂きました。ありがとうございました。囲碁と将棋を比べてみると、ルールは違うけれど、盤をはさんで一対一で相手と戦うという点は同じです。誰の助けもなくたった1人で作戦を練って、頭を使って相手を倒さなくてはなりません。大変だけど、楽しい競技です。僕が囲碁の教室に通い始めたのも、小田切さんと同じ小学4年生の時です。僕自身は4級でへたくそですが、小田切さんの話を聞いていて、僕ももっともっとが

ばって勉強を続けたら……もしかしたら、将来プロを目指したり、教室を開いたり、専門雑誌の記者になったり、という道を目指せるのかなあ、と漠然と思いました。もちろんきつとすごく厳しい道だと思いますが、小田切さんをお手本に、がんばってみようと思います。

【小田切秀人さんの感想】

伊藤くんは囲碁を習っているということで、将棋とはルールとゲーム性が違うものの、日本の伝統文化の心を継承している共通点があるためか話が弾みました。初めて会う大人にもキチンとあいさつや会話ができるのは、普段から年長と盤上で接する機会が多い囲碁将棋に親しむ子どもたちの共通点だと思います。

囲碁将棋は体力が勝敗の結果に大きく左右されるスポーツと違い、だれもが対等に、気軽に楽しめる遊戯です。しかも自分で考えて結論を出さないといけないので考える力を養うには最適といえるでしょう。そのせいか「TVゲームより囲碁将棋」という親御さんがたいへん増えております。

最近では囲碁将棋を正課に取り入れたり、推薦入学の枠を設ける高校、大学が増えております。伊藤くんにはこれからも囲碁を続けてもらい、有意義な青春時代を送っていただきたいと願っております。

“虫”を通して自然の神秘を知る楽しみ

語り手:小林弘一さん(高井戸在住)

インタビュー:今井達也さん(東京学芸大学付属大泉中学2年・男子 上荻在住)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■昆虫に目覚めた子ども時代

小林さんが虫に興味を持ったのは小さい頃に買ってもらった「ファール昆虫記」や「シートン動物記」がきっかけとなりました。小学校は世田谷区でした。しかし同級生に虫好きの人がいなかったために、横の広がりはありませんでした。でも、理科の先生が標本を作っていたため、興味は増しました。

大きな広がりとは中学に入ってからです。生物部に所属し、クラブの先輩から昆虫の話聞いたことで、蝶を追いかけるようになりました。クラブで谷川岳へ合宿に行き、ウラキンシジミなど珍しい蝶とのふれあいもしたそうです。昆虫を本格的に始めたのはこの頃からで、採集、標本製作、写真撮影などを始めたそうです。この中で一番強く興味を持ったのが昆虫や植物の写真撮影。当時のカメラでは接写が無理だったため、植物中心になりがちだったが、父上が愛用していた二眼レフカメラを借り、虫や植物をたくさん撮っていったそうです。

その後は大学の電気工学科に入学、卒業してステレオ製作の会社に就職、輸出を担当したそうです。会社に入ってしまうと趣味の時間はほとんどとれず、撮影は一時休止となりました。

25、26歳のとき、香港に駐在し、英語や広東語をかじったそうです。その後コンピューターセクションのシステム部や品質保証関係部署に入り、大型コンピューターのシ

ステム設計を担当し、「どこでプログラムを使ったら上手くいくか」というシステム開発の技術を学んだそうです。ここで身に付けた知識を活かし、現在勤めているIT関連の会社に転職しました。しかしITと趣味は全くといってよいほど接点がなく、趣味はあくまで趣味として持っているそうです。

しかし、興味としての接点はあるようです。理系、技術系の人是一般に、図録や図鑑が好きで、抽象的なことを考えるよりも、図鑑に出てくるリアルな情報に魅力を感じるとおっしゃっていました。

■珍しい蝶から身近な蝶へ

仕事の合間などに趣味の時間を確保できてもなかなか観察ができなかった時期がありました。それは、昭和30～40年代に、ゴルフ場開発などによって蝶の住む環境が激変した時です。事前に蝶の生息している場所を調べてから行かなければならなくなり、のびのびと撮影や採集ができなくなってしまったことが残念だとおっしゃっていました。中学生のころは割と気軽に採集することができたギフチョウも、現在の東京では、見かける可能性はほとんど無いとのことでした。食草のカンアオイも減り、高尾の裏山を一日歩いても何株も見つけられる程度の量しかないようです。カンアオイはもともと1年間に1cmしか成長しないような植物で、なかなかカンアオイ自身もギフチョウも、増えることができないそうです。そこで、東京でも数多く見ることのできる蝶を追うことにしたそうです。例えば、地面や木にとまっているとなかなか見つけることはできないが、飛ぶと非常に美しいルリタテハや、赤や黒のまだら模様の美しいヒメアカタテハ、近年温暖化により北上してきた、羽のはじ(ツマ)が黒いツマグロヒョウモンなどです。



▲小林さんが標本の一部を持ってきて見せてくれました。

■好きな虫・嫌いな虫

みんなに嫌われがちなスズメバチも、小林さんの好きな虫のひとつ。別名へボという少々かわいそうな名をつけられているクロスズメバチは、ハチノコの素材として有名。またこのハチは、刺されてもさほど痛くなく、毒も少ないので割とかわいいとおっしゃっていました。感じ方は人それぞれである。ちなみに僕もかわいいと思っている一人である。

虫は全体的に好きな小林さんだが、嫌な気分になるときもある。ひとつは、はたいてもなかなか離れてくれない、アカウシアブに刺されたとき。二つ目は、迫ってくるときのムカデやゲジ。だが、あの類はじっくり見てみるとなかなか芸術的な足をしていて美しい、とのこと。三つ目は、虫がいきなり現れたとき。どんなに美しい虫でも、いきなり目の前に落ちてきたら驚きます。最後は知らないで触ったら虫だったとき。枝や葉だと思っただけで触ったら虫だった、という苦い思いはなるべくならしたくありません。しかし小林さんは、「基本的には虫は大好き。生き物とは友達でいたい」とおっしゃっていました。

■昆虫標本

昆虫は自然界では、事故や捕食などの被害を受けてどうしても羽や体に傷がついてしまいます。そこで小林さんは飼育という手

段をとりました。卵や幼虫を捕まえてきて、その虫の食草とともに大きめの金魚鉢などに入れ、育て、羽化(成虫になるための最後の脱皮)したあとをよく観察して、その後標本にするそうです。そうすると傷の全くない美しい標本ができるそうです。

■よりよい写真撮影をめざして

現在では接写性能の高いカメラも安価で購入できるが、昆虫写真を撮るために作られたカメラというものはそうない。そこで役に立つのが旋盤なのだそうです。旋盤の使い方を覚えておくと、カメラの構造が変更できるので便利、とのこと。今では機械旋盤は5万円～10万円で購入できるので、どこかで旋盤を覚えておくといいそうです。



▲虫も植物もジックリ見ると普段は気づかない美しさが見えてくる。

■みんなを虫好きにさせたい

家族は虫が好きかどうかわからないとおっしゃった小林さん。でも、人生で一番長く接する家族は、やはり好きになってほしいようです。虫に対して特別な感情を持っていない人は、どこかで虫に対して感激してくれる場を設けると好きになってくれると話す小林さん。しかし、「虫は気持ち悪いものだ」という感情しか持っていない人に好きになってもらうのは難しいようです。また、虫の魅力については、どこかに神がいるのではないかとこの神秘感が好きだと語る小林さん。確かにあの構造や動作を見ると、神がかり的な複雑で巧妙なつくりをしています。

■環八の街路樹

いま小林さんが観察しているのは、モミジバフウ(紅葉葉楓)というフウ(注)の仲間です。種がとても興味深い形をしていて、とても面白いそうです。東京の中でも大きな道路に属する、環状八号線の街路樹はほとんどがこの木です。なぜこの木を街路樹に選んだのか、という疑問からモミジバフウの観察が始まり、今では種子を採ってきて進化系統まで調べる域です。僕はこの種子を小林さんからいただきました。ぜひ発芽させて研究のお手伝いになりたいと思っています。

注：フウ(楓)＝4月に花を咲かせる落葉高木。高さは20mくらいになり、中国原産。中国では「楓」と書く。日本では「楓」はカエデの仲間にあてることが多いのだが、もともとマンサク科のフウをさす。この漢字が日本に渡来したとき、掌状に分かれた葉が似ていること、美しく紅葉する共通点を持つ「かえで」に充てたと考えられる。イロハモミジ(いろは紅葉)やイタヤカエデ(板屋楓)などはカエデ科に属する。



▲モミジバフウの種はまるで大きなコンペイトウのよう。私たちの周りには「自然」と言う名の芸術家の作品でいっぱい。

【今井達也さんの感想】

なかなか好きになってもらえず毛嫌いされることの多い虫を、子どもの頃から趣味として持ち続け、今でもそれを続けているという。昆虫、植物採集と写真撮影と、しっかりと「好きなもの」を見つけることのできる方とお話する機会を持って、非常にうれしいです。僕も、将来どんな自然と関係のない職業に就いても、小林さんを見習い、「趣味」という物を大切にしていきたいと思いました。

【小林弘一さんの感想】

私が子どもの頃は、テレビが普及し始めた時期で、もちろんコンピューター利用のゲームなどありませんでしたから、必然的に外で遊ぶことが多く、昆虫少年も今ほど珍しいということはありませんでした。でも、年を取るまで虫好きで通す人は多くないかもしれないかもしれません。いまの時代に、虫好き少年に出会えてとてもうれしかったです。より大きな自然の神秘に触れるきっかけを虫がきつと作ってくれることでしよう。きっかけは、樹でも花でもよいので、さらには、もっと多くの人が自然を好きになることを願っています。

インタビューの最後に環八の街路樹が出てきます。自然の神秘に触れる糸口をこの樹を観察することで、見つけたいと、1年以上写真を撮りながら考えています。モミジバフウの仲間のフウの葉の化石は3500万年前のものが見つかっています。地球の上では、人間の先輩です。花も咲けば種も出るのでありますが、ご覧になった方はあまりいないのではないのでしょうか。花びららしきものはありません。花の中におしべとめしべがあるのではなく、近くにありますが、雄花と雌花は別々です。種が入っている実はトゲとげのボールです。いつ見られるの、どこで花を見ることが出来るの…こんなふうに思ってもらえたら、みんなで観察しに行つて、自然の中の虫や植物の素晴らしさを分かってもらえるのではないかと思う次第です。

私たちの課題 ～誰もが暮らしやすい新しい社会を作ること

語り手:松田輝雄さん(成田東在住・東京農業大学客員教授 元NNKエグゼクティブアナウンサー)
インタビュー:小田菜南子さん(國學院大学久我山中学校2年・女子)

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■インタビューに至った経緯

私は学校の授業で意見文を書いた時、自分の意見を他人に伝え、理解してもらい喜びを知りました。そのことがきっかけとなり、将来はマスコミ関係の仕事に就きたいと考えています。夏休みに、宿題の一環で新聞記者の方とお会いする機会があり、お話を伺いました。今までの経験を全て積み上げて出来た考えは、何事にも代え難いものであり、今までとは違う目線での見方を教えてください。私はもっと色々な話を聴いてみたいと思い、今回NHKのエグゼクティブアナウンサーとして活躍され、現在放送以外でも自然環境や家族をテーマにした講演で全国を駆け回る松田輝雄さんにお話を伺いました。

■アナウンサーの役割とは

松田さんには、昔からマスコミ関係に進みたいという気持ちはありましたが、それは『アナウンサー』というわけではなかったようです。その時の社会の動きや就職状況等から、最終的にNHKのアナウンサーを選んだそうです。なりたいと思っていたものに必ずしも進めるわけではない。むしろ色々なことを経験してから進路を決めた方が絶対的にいい、と話してくださいました。

アナウンサーという仕事は、「たくさんの人に会える素晴らしい仕事」です。また、そのためには「会いたい」と思う人に、自分が聞きたいこと、会いたいと思う目的を明確に伝

え、番組価値を理解してもらうことが必要だと思います。たとえ記事が小さくても、会うことによってよりたくさん情報、あとでじっくり考えたいことなど、多くの財産を得ることが出来る。会うことの百倍学べる。そうお考えになっていました。

また、仕事をする時に「このことだけは守る」と考えていることは、皆で協力するということだそうです。番組を作るには、たくさん取材スタッフが必要で、その代表者がアナウンサー。重要な情報を全部伝えることは出来ないの、絞ったことを言葉で表現する。そのため編集者でもあると言います。皆で一緒になって作り上げ、視聴者やたくさんの方が願っていることを伝えられるかどうかが大事。あくまでも主役はその場にいる人たちなのです。「創造者」ということを忘れず、訴える力を強く持つこと。そこにあるものを発酵させ、温かいものを伝えたい、と松田さんは話してくださいました。どの仕事も大切で、力を抜いてはいけません。皆で一つになることが一番なのです。



▲アナウンサーはたくさんの人に会えます。あつて聞く、聞いた話を後から自分で考える、こうやって得たものが私の財産になっています。

■地域住民の結びつきを強くするには、まず家族から

また、家族についての講演もなさっているのです。そのことについて質問すると、皆で幸せになって欲しいと言います。皆で集まって、皆で幸せになりたいと願う。家族の一番

の幸せはやはり健康です。健康には、食べるのが大切ですが、皆で食べて皆で喋ることが一番の健康です。口は食べるためだけでなく、喋るためにある。そして、生きることもまた声を出すことに繋がっていくのです。

「羊水の中の赤ちゃんは、胸いっぱい吸い込んでいた水を吐き出して初めて呼吸をする。お医者さんがその時に『一人の人間が産まれた』』ということを言うでしょう。息をしたから泣く。泣くことから生きることは始まるのです」

家族の幸せにはたくさんの形があり、夫婦で暮らしている中で娘婿がパソコンを直しに来てくれたり、時には困ったりすることも全て幸せと言えます。そして、家族が好き～家族の結びつきが強い～近所の結びつきが強い～杉並区民同士の結びつきが強い、というように繋がっていくのです。

■時代を変革する若者たちへ

松田さんからの、夢の実現を目指す若者たちへのメッセージは、今の社会を新しく作り直して欲しい、ということだそうです。「若者はすごい、私たちが出来ないことがどんどん出来る」。だから携帯電話で仲間内のコミュニケーションを楽しむだけでなく、社会を新しくすることにも積極的になって欲しい、と松田さんは願っています。「僕らの作った戦後の社会は、私たちが生きるために出来たもの。若い人たちのためのものではないところがある。そういうところは壊して新しくしないと、私たちのコピーでしかないんだ。だけど、社会を新しくする時、シニア・壮年の方のことも忘れないで欲しい」と。私たち若者が生きるための社会にするには、一度今の社会を自分自身で再点検しなければなりません。その時に自分たちの事ばかりを考えていたのでは「本当の社会点検」にはならないと思います。若者だけでな

く、高齢者や働き盛りの方たち、そして子どもと女性、皆が暮らしやすい社会を作ることが、私たちの課題です。

さらに、私は女なので、これから先、そのことが壁になる時が訪れるかもしれません。日本は、口では男女平等と言っても、まだ実際にはそうでない部分があります。女ではなく、一人の人間がここにいるんだ、と言える社会にもしなければならぬのです。

また、私たちが今すべきことは、自分自身を豊かにすることだそうです。色々なことを吸収することが大事だと教えてくださいました。学生時代と社会は全く違って、例えば教師を目指す人であれば、そのための授業と実際の現場とはイコールでは結べないもの。そのため、学校は社会に出るための練習場所と考えて、自分の中身を豊かにしなければならぬ。学校は、現実には負けないものを蓄える、「生きる」ための学問を学ぶ場所なのです。

そして、今の日本は学歴社会のため、まずは勉強をして大学に入ること。「能力を測らずに形式で人を判断する面が日本社会には多くあります。だから、自分がそんな世の中を変えていくという自覚を持って今を過ごして欲しい」。私だけでなく他の人も、全ての若者がこの自覚を持って生活していけたらいいと思いました。

最後に、これから挑戦したいことを何うと、まず杉並の地域社会に入りたいということを目指しました。「一緒に命をかけて仕事をした仲間だけでなく、小さな関わりをした人が、今でも連絡をくれたりすることはうれしい。地域社会と一緒にやって何かをしたい」と考えていらっしゃいました。

【小田菜南子さんの感想】

私がこのインタビューを終えて、一番印象に残っていることや考えさせられたことは、たくさんある中でも、「一緒に」ということです。松田さんのお話の中に「一緒に何かをしたい」、「一緒に作る」、「一緒に願う」と、何度も「一緒に」ということを大切にしている

ことがうかがえる場面がありました。近所の付き合いが減ったり、パソコンや携帯電話などの便利なものが普及したり、家族の帰宅する時間がバラバラだったりする中で、私たちはあまり「一緒に」ということを考えなくなってしまうと思いました。友だち同士、家族同士、ご近所同士や地域一体で、この「一緒に」という考え方が広がれば、他人を思いやることが出来、それが住みやすい街づくりへと繋がっていくのだと思います。

【松田輝雄さんの感想】

1) 報道人として、一番の醍醐味

番組のなかでは、アナウンサーは何人も取材スタッフが集めた情報を分析します。その上でいくつか、重要な情報を選択する。放送する時間が限られているので、重要な情報を全部伝えることができない。1点、2点に絞って、絞ったことを言葉で表現する。(選択と集中)だから、取材された人や、取材スタッフが思ったことを言う最終表現者がアナウンサーで、番組の編集者の一人でもあるのです。また、映像とアナウンサーとの関係ですが、映像を編集する人やカメラマンが何を言いたかったか、映像の主旨を理解して意図を見つけ出す喜びはかけがいのないものです。ですから、番組作りに携わる一同の代表者がアナウンサーであると考えています。

2) わたしのテーマは「家族の幸せ」

幸せだと家族が強くなる、また、隣の人が好きになる、そこでまた、幸せを感じることができます。家族は幸せのシンボル、親子と夫婦がキーとなる。この関係がおかしくなると幸せが消えていくことになりかねないのです。幸せは健康の源で、「食べてしゃべれる」こと。口は使う、話し合うものです、口紅をさすところだけではありません。話をすることで互いを信頼し、相手を大切にすることです。